

---

# **かずみ・2200年の未来へ行く**

窪まり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

かずみ・2200年の未来へ行く

### 【Zコード】

Z0757Z

### 【作者名】

窪まり

### 【あらすじ】

200年後の未来から、ある日突然、時空の裂け目から、全裸の女性がアパートの窓から入ってきた。女性にしか興味がない、20歳の、かずみは、なぜ？突然、全裸の美少女が入って来たのか理解できなかつた。彼女の正体は、200年後の未来から来たアンドロイドであつた。5年間の女同士の同棲をしたが、突然別れることになり、200年後の未来で彼女と再会したいために、自分の肉体を冷凍保存するために風俗嬢として働くことを決意した。だが現実は厳しい。いろんなお客様を相手にしなければならない。なお、性風

俗の世界を想像で描いたものですから、リアリティは少ないかも知れません。

## かずみが、なぜ性風俗嬢になつた理由（前書き）

ある日、突然、全裸の美少女が、主人公かずみの部屋に入ってきた。5年間の同棲生活にピリオドを打ち、本気でアンドロイド「99JP」を愛してしまった。

200年後の未来に行くため自分の肉体を冷凍保存しようと考え、性風俗の世界に入った。

## かずみが、なぜ性風俗嬢になつた理由

かずみは、200年後の未来から来た美少女アンドロイドと恋に陥り、5年間も毎日のように女同士の肉体関係をもつていた。

だが、突然の別れに消沈してしまった。

美少女アンドロイド1999年は、謎の時空の歪みから200年後の未来からタイムトラベルして來たのである。

200年後の未来の科学でも不可解な現象である。そして、約5年間、かずみと1999年といふアンドロイドは女どうしの恋愛をし同棲しまつたのである。

1999年は、見た目は普通の少女と区別つかない。かずみのアパートに5年間居候していた。女同士で肉体関係を持つてしまつたのである。

その5年間の思い出が詰まつたアパートからでることになった。それは甘づっぱい思い出がみちているから、一人で、その部屋になると、孤独感を感じる。とても切ない気持ちになるからである。

インターネットで、「自分の肉体を冷凍保存し、未来へ旅立つ」という記事を見つけ、200年後の未来へ行くことを決心した。

だが、自分の肉体を冷凍保存するには、数千万円もかかる。どうすれば、200年後の未来へ行けるか考えた末、最もてつとり早いのが、風俗嬢になることである。

だが、かずみは男性がとても苦手である。ましてＳＭ嬢の女王様になるしても、男性の裸を見るだけでも抵抗がある。その上、いじめられて興奮するのを見だけで吐き気をもよおす。

かずみ25歳。20歳のとき200年後の未来から来た美少女アンドロイドに恋してしまい、初めは一緒にお風呂に入り、同じベットの中で一緒に寝て、それがエスカレートして、あらゆるレズ行為をする仲になった。

女性が女性を求める風俗店はないだろ？か考えた。インターネットで検索したが、なかなか良い店がない。私に相応しいビアン専門のお店はないだろ？か？

かずみは独り言を言った。

「やはりオソナ同士が、一番気持ち良いわ。特に若い子だと肌がツルツルして肌と肌が接触するとき気持ちいいの。どう考へてもオソナ同士でエッチなことをするのが私にとって一番相応しいわ」とつぶやいた。

かずみのビアン風俗嬢レビューとなるが・・・。

かずみは中学一年生の時、もう少しのところでレイプされそうになつたため、男性を嫌悪するようになった。学校の裏で、ガラが悪そな不良男子生徒に襲われ、悲鳴を上げた。危うくレイプされそなところ、他の女子生徒たちが通報してくれた。そのなかで先輩の美しい女子中学生がいた。髪の毛が長く、とてもきれいだった。その美少女の先輩は、かずみに優しく声をかけた。「大丈夫?」膝や太ももにアザができ、軽い擦り傷があるので、その先輩の女子中学生は、かずみを優しく介抱してくれた。

『なんときれいな女性なんだろう』と思つた。それ以来、女性に対して性的な感心をもつよつになつた。

それ以来、かずみにとつて彼女は憧れの対象になつた。それ以来、その経験によつて、男性は怖くつしかたないと感じた。どんなにおとなしそうでも、やさしそうでも男は、人の目がないところでオオカミになると思つたからである。その事件以降、かずみは異性に全然興味がなくなつた。いや、男性を強く嫌悪するようになつた。そして女子高に通うようになり、百合の世界に目覚めてしまつた。

女子高での生活はバラ色だつた。そして女子短大に入学し、いろんな女の子とつきあうよくなつた。オンナ同士の楽しい思い出ばかりであつた。卒業後、親元を離れ、アパートを借りて生活したときに、突然の閃光、自分の部屋が歪んだように見えた時、窓から全裸

の美少女が入ってきた。

かずみは、あまりにも美しい身体を見て、それは芸術的な美しさだつたので感動してしまった。

「これは夢なの? とてもリアル!」 だが現実だった。

タオルを持ってきて、その全裸の美少女と話し合つた。

「あなたは、どこから来たの? わたしの名前は、かずみ。あなたは?」

その全裸の美少女は、しばらく黙つていた。

『わたし夢を見ているのだわ。これは夢。こんなSFチックなことなどありえない。もしあつたら逆に気持ち悪い・・・』 と考えた。

全裸の美少女の肩にタオルを置き、話し合つた。

そして食事をすすめたが、その全裸の美少女は何も食べよつとしなかつた。

かずみは、彼女がアンドロイドであることに気づくまで時間がかかった。

なにか着るモノを探して、下着とパジャマを用意した。だが下着の着かたを知らないアンドロイド「99」は、それが何なのか理解できなかつた。

かずみは、もう一度訪ねた。「あなたの名前は?」  
「どうして全裸でここに来たの?」

かずみは足の裏をみた。199Jyという刻印があり、「かわった  
入れ墨ね。」その時、アンドロイド199Jyは初めて答えた。

「それは私の製造ナンバーです。わたしの体内にあるナノチップにはもつと詳しい製造情報が入力されています」

かずみは何のことなのか理解できなかつた。まだ普通の人間だと思  
い、まさかアンドロイドとは思わなかつた。

かずみは先に夕食を食べたが、アンドロイド199Jyは、いつま  
でもトイレに行かないし、差し出した飲み物や食べ物に手を出さな  
かつた。

そしてアンドロイド199Jyは突然、無機質な言い方で言つた。  
「私の残り稼働時間は、2007.5日」

かずみは「? ? ?」と思つた。

そして、アンドロイド199Jyにお風呂入らないかと言つた。

「お風呂とは何ですか?」

「え? 何なの?」の質問は?」と、かずみは啞然した。

「お風呂とま、身体を洗つといひなの」

「では、外部の汚れを落とす作業ですか」

「そうだけど」

「あんた。全裸で私の部屋に突然は行つてくるし、いつたい何なの？」

その時、かずみは一人でお風呂に入る』ことを考えた。

お風呂になると、一人は全裸であり、そして、身体を見たら、体毛が全く無い。

「あの娘、全身、完全脱毛なんだわ。徹底しているわ」そして足の付け根、すなわち下腹部を見て驚いたのは、肛門と女性性器が無いことに気がついた。

『もしかして、彼女はandroイドなの？信じられない！今の科学では作れないはず』

かずみは質問した『あなたの製造年月日はいつなの？』

かずみはアンドロイドだと初めて認識した。

『わたしの製造年月日は西暦2197年9月3日午後7時35分で

す」と答えた。

「えー、今は西暦2006年12月なんだけど・・・。」

ふたりでシャワーを浴びたとき、アンドロイドー999が言った。「私を洗うとき、なぜ水温40・5度の温水をかけるのですか?」

「それは、温かいほうが良いに決まっているからじゃない。冷たい水で洗うと風邪ひくし」

「では、この水の集まりは何ですか?」

「お風呂に決まってくるじゃないの」と答えた

「『おふろ』とは何ですか?」と質問した。

「お風呂と云ふ、人間の身体を温めるためにあるもの」

「一緒に入つてみない」といって、アンドロイドー999をお風呂の入り方を教えながら入れた。

二人が入ると、お風呂のお湯がたくさん出て行つた。

かずみとアンドロイドー999は、お風呂の中で、抱き合つた。

「とても気持ちいい。彼女の肌がすべすべして、弾力があって、私の身体そのものがとろけやが・・・」

「こんな気持ちで思いをするなり今すぐ死んでもかまわない」と強く感動した。

それが、かずみとアンドロイド「99」の初めての出会いだった。

だが、その5年後、時空の裂け目ができた時、200年後の未来に戻らなければならなと思い、アンドロイド「99」は、かずみの元から去ってしまった。別れのときが訪れたショックが強すぎて、かずみは職場を無断で休むようになった。

そして、ネットで自分の身体を冷凍保存して未来で再生してくれる記事を読み、いちがばちかで200年後の未来へ旅たというと本気で思った。

## 厳しい性風俗界の現実 暇で長い休日

かずみは25歳で性風俗デビューした。年齢的には遅いデビューである。

かずみは今後の生活を考えた結果、〇一の仕事をしながら、風俗の仕事を隠れてすることにした。

土曜・日曜日が、かずみの風俗出勤日である。

ビアンを相手にするデリヘルであり、お客の指名があれ、お店の自動車でラブホテルまで送るのである。ボーグッシュな顔をしているので、ときどき、おとなしくかわいらしい十代後半の少年と間違えらるることが良くある。もつと幼い顔だったなら、ショタ向けの外見になつたかも知れない。

かずみはネットでビアン系性風俗店の募集を探し続けた。

ビアン系の性風俗店は意外と少なく、最近の性風俗店にとつて大きなライバルは出会い系サイトである。

高いお金を出して性欲を発散するよりも、出会い系サイトでセックスフレンドを作るほうが手っ取り早いからである。

だから高いお金に見合つたサービスをしなければ、リピーターがつかない。指名されない稼げないのである。いまどき正社員の〇一でも、まだ20代では一ヶ月で給料を使いつてしまふから、とても短期間で数千万円ものお金を貯めるなんてできるわけがない。

また、今どき〇一（それも正社員）という美味しい職業を辞める訳

にはいかない。

イメクラなら、残業を断れば、毎日、出勤できるが、相手は男性だから、かずみにとつては気が遠くなるような仕事である。とても男性を相手にする気にはなれない。

イメクラは、ターミナル駅がある場所ならどこにでもあるが、ビアン系風俗店はほとんどないから、えり好みできないのである。

性風俗デビュー初日の土曜日の午前10時半にお店で待機した。

待機中は、狭いお店の中で他の風俗嬢と会話したり、テレビを観て時間をつぶす。

性風俗初日、かずみを指名するお客様は誰もいなかつた。

かずみは容姿がよくスタイルもいい。今日はなぜかお客様さんの指令が来なかつた。ギャラはもらえず、待機料だけ、ほんの数千円だけしかもらえなかつた。

悔しくなつて、一人でバーに行き、お酒を飲んだ時、若いお兄さんから声をかけられたので無視したが、何度も声をかけるので、ほとんどお酒を飲まず、急いで料金を出して出て行つた。

若いお兄さんは、おとなしい優しそうな男性だつたが、かずみは男は大嫌いであつた。

途中、コンビニでお酒と、つまみを買い、テレビをつけビアン系のDVDを観た。

ビアン系の女優二人が裸でエッチなことをしている。そのDVDは某大手の通販サイトから購入したモノである。

出勤初日は、ボーグンシューな、かずみとつて似に合つショートパン

ツにタンクトップである。季節的には肌寒い。この服装は肌を露出し過ぎ。

男もののYシャツを着て、ビアン系DVDを観ていると性的に興奮してしまい無意識に、手がショーツの中に入り、オニーをしてしまった。アルコールが入っているから自制できない。

気がついた時には深夜2時になつており、日曜日の朝もお店に出勤しなければならないと思い、シャワーを浴び、そのまま裸でベッドの中に入つて寝た。

日曜日にお店に出勤した午前10時半、今日こそは指命されたいと思った。

狭いお店で、他の風俗嬢が次から次へと指名され、外出したが、かずみはいつまでたつても、指命されず、半分苛立ちを感じた。

かずみは、つぶやいた「わたし胸が小さすぎるから指命がないのかも。胸の大きさは女の魅力だから」

夜7時、やつと、かずみに指命された。

それは既婚の40代の女性だつた。一緒にデートするだけのお客だった。

「やつと、指命されたわ。よし、頑張るぞ」と行き込んでいた。

その40代の女性は、ふくよかでウエストが太く、そして年齢よりも老けていて、自分の母親みたいな女性だつた。そのお客を観た時、かずみは性的に萎えてしまつた。でも、デートだけだから、ちょっと買い物をしたり、一緒にお酒を飲むだけで十分だから、まさか肉体関係はないだろうと思つた。

「Jのお客さん60分だけのデートコースだから、適当に一緒にいればいいだろう」と思つたら、人気がないところで、かずみの露出した太ももを突然、揉み出した。かずみは、いかにもボーグ・イッシュな雰囲気だからいつもショートパンツを履いている。

「いきなり、太ももを揉むなんて大胆なお客さんですね」と苦笑いしながら言つと、

「あんたを指名したのは、まるで少年みたいな顔だから。もともと私は女性に興味がないから」といつて次は、強引に口づけをされた。かずみの無い胸を見ていつた「胸がほとんどないから、まるで、かわいらしい男の子みたいだから」と言われ、カチンと来た。その「男の子みたい」という言葉が気に入らなかつた。

それから、かずみは髪の毛を伸ばし、できるだけフェミニーンな女性になろうと決心した。

かずみはお店に帰つた時、同僚の風俗嬢に今日のことを愚痴つたが、大声で笑われた。

結局、指命したお客様は、40代のふくよかな女性一人だけだつた。当然、歩合制であるから、お客様一人、それもホテルには行かないデートコースだから、今日の、かずみの日当も安かつた。

悔しくつてしまなく、そのままバーに行き、お酒を飲み、酔いつぶれてタクシーを使って自分のアパートに帰つた。



## ついでに厳しい性風俗界 真性サドセセ性格が悪いお客様へ

かずみはビアン系性風俗の仕事は快樂と実益を兼ねたモノだと思つたが現実は、そう甘くない。

かずみが土曜・日曜に勤める性風俗店では、風俗嬢の入れ替わりが早い。

なかなかお客様からの指名が来ない、かずみはなぜ、お店の風俗嬢がすぐに辞めてしまうか、一ヶ月以内で理解できた。

ほとんどが、性格が悪いお客様か、女性を虐めることに快感を感じるお客様ばかりである。

不特定多数の女性とエッチなことをして、気持ちいい思いをして、短期間で数千万円も稼ぐなど、現実は甘くない。

かずみの場合は、ほとんどの60分とか120分の「トーントース特典」から、ただ一緒にいてお客様の愚痴をうなづくだけでもよかつた。ほとんど女性同士の肉体関係がないから、あまり稼げないのである。で、この業界になれ始めた時、かずみを指名するお客様が少しがあらわれた。

いかにも、上品なお嬢さんで、表情がやわらかうつだった。言葉使いも丁寧である。

かずみは、ついに女同士でエッチなことができると喜んだ。かずみの頭の中で様々な妄想が懸け巡り、考えているうちに、ムラムラしてきてオニーをしたくなつたが、楽しみは後だと自分に言い聞かせた。

お店の自動車で、あるワープホテルに送られた時、かずみはホテルに初めてのお客さんがいる部屋のドアをノックした。

だが、お店に来た時は真逆な態度。言葉使いが悪く、かずみの無い胸を見て「少年みたい」と言った。その言葉に力チンと来て、言い返したい気持ちを我慢して、二コ一コしながら、対応した。

「お客さん。どのようなプレイがお望みですか」

「お前、まるで男みたいだな」

ボーグ・シューなかずみは、その言葉をきいて、いまにも爆発しそうだった。

「おい。服を脱がせろ。この変態」

お客は、ドレスシーなワンピースであり、背中のチャックを引き下ろそうとした時、

「何やつているのだよーーこのひすらバカーお前、やる気あるのか」とキツイ口調で言った。

「わたしの服は、お前が着る安物の服ではない。丁寧にたため!」  
と言われた。

かずみはストレスが最高状態になり、そのお客を殴りたくなった。  
だが、相手はやつと自分と肉体関係を持つことができる初めてのお客だった。

そのお客は、一度限りのお客であり、この地獄のような時間を過ぎ去れば、そのお客とは永遠に会うことはない。

いかにも上品なお嬢様で、大人しそうで優しい女性は、お店に来た時とは別人のようであつた。

かずみも服を脱ぐと「何なんだよ。この安物の下着。ちゃんとした女なら、人に見られても恥ずかしくない下着を着ろよ」と乱暴な言葉が返ってきた。

かずみは、もう我慢できなくなり、お店に電話しようかと迷った。あまりにも態度が横柄であるからである。

そして、かずみにショックギングなことを言った。  
全裸になつた二人は、かずみの顎を触り、そして乱暴な口調で言い聞かせた。

「ねえ、わたしオンナを虐めるのが好きなの。マジ女性が快感でもだえるよりも、マジではない女性が苦痛に満ちた表情を見るのが好きなの。」

かずみは、限界に達した「お客さん、このお店はSMクラブではありません！私にも人権というモノがあります。あくまでも仕事ですから」と言つたら、そのお客は逆ギレしてしまつた。

かずみは、これは不味いとおもつて、すぐ、だけ座して謝つた。とても悔しい気持ちを感じた。

「お客さん、申し訳ございません。以後、気をつけますから」

そのお客は、かずみが謝つたことによって、自分が上位にいると思いい、そして持参した道具をだした。

「ねえ、これが何だか解る」

かずみの頬に、SMに使う鞭で撫でた。

かずみは、丁寧に言つた、「お密様、それはサービス外です。申し訳ござりませんが、そのようなプレイはできません」と注意した。

そのお密は言つた「何言つていいの！わたしに反抗する気…」

「では、シャワールームでお背中お流しましたようか。」と言つてバスルームに行つた。

かずみは、マゾではないから、そのお客様の行為は苦痛でしかたなかつた。かずみは真性レズだが、マゾではない。

バスルームに行く途中、あまりにも酷い態度のため、かずみは泣きたい気持ちを抑えながらバスルームに行つた。

全裸になつた二人は、シャワーを浴びた。

そして、お密さんの背中を恐れ恐れ、ボディソープを使いながら洗つた。

「ねえ、やる気あるの。あんた」と言われた。かずみは、かずみなりに一生懸命やつている。

「さぞかし性風俗嬢はお金が稼げて良い身分」だと皮肉を言われ、そして「あんた。それでも性風俗嬢なの。こんな洗い方では身体の汚れが落ちないわよ。」そしてさらに「あんた、まともにお風呂入つてないの」とバカにした言い方をした。

そして、怒りを通り越し悲しい気持ちになり、お密さんが見えないとこりで涙をながした。

そして、お客さんの身体を洗い流した後、かずみも身体を洗った。

女性一人が、全裸でいて、かずみに壁に手をつくよに命じた。

お客「ねえ。これから私のいうことに服従しなさい。両手を壁につけ、背中とお尻を差し出しなさい」と命じられ、いきなり強い鞭が、かずみの身体に当たった。強烈な痛みが走った。

かずみは、我慢できなくなり、そのお客に言った。

「お客さん、わたしはＳＭ嬢ではなく、ビアン相手にサービスをする性風俗嬢です。いくらなんでも、この扱いは、不正行為です！ただちにプレイを中止します」と強い口調で言った。

そして、ラブホテルの部屋にある電話機に手をかけた時、お客は、ヘラヘラした口調で言った。

「ちょっとやり過ぎただつたわ。お店に電話しないでほしいけわ。今までのことは、謝るから、わたしを抱いて欲しいの」と言い始めて、かずみは電話の受話器を元の位置に戻した。

かずみは、お客さんを抱いた。全裸の女性が一人で抱き合つ。かずみは言った「ねえ。口づけしましょう」と言って、かずみとお客は口づけをした。

そして、時間までプレイが行われた。

お客の性欲が満足に達した時、そのお客は別人のよつな、お店に来た時のような優しい女性となつた。

「今日は、とても楽しかったわ。で、名刺とか無いの?」とお客は訪ねたが、

かずみは「申し訳ございません。名刺が切れていて、今ないです

と嘘を言った。

本当は、今日のお客が初めてであり、名刺は有り余るほどあるが、もう一度とあのお客様を相手にしたくなかった。

かずみは考えた「こんなお客様ばかりだと、いくら女性との肉体関係が好きでも、嫌になるわ。だから、辞める風俗嬢の娘がいるのだわ」と思った。そして、次はお客様に舐められないように、不快に感じるお客様が来たら、すぐにプレイを中止しようと思った。

## 優しそうなイケメンを振ったかずみ

月曜日の朝、頭痛がした。日曜日のお客様の態度が悪く、ストレスとなり、帰りには閉店までバーでお酒を飲み、酔っ払って他の知らないお客様に、風俗での愚痴を言っていた。

帰り、午前2時、タクシーを呼んで、かずみが住むアパートに行つた。日曜日の稼ぎは、タクシー代とバーの酒代で消えてしまった。

午前3時、ばつたり私服のままベットに横になつてそのまま寝てしまつた。

午前6時半、目が覚めたとき、頭が痛い。会社を休もうと思つたが、今日は月曜日。

月曜日に突然休むわけにはいかない。いや、休みにくい雰囲気である。

洋服と下着を着替え、いかにもおしゃらしい服装をした。ミニスカートに黒のストッキングを履いて、必死な思いで出社した。「今日が月曜日でなければ、休めるけど、突然、月曜やすむと上司に変な目でみられる」とつぶやいた。

頭痛がするから仕事がはかどらない。早く退社時間がくるのを待つていたが、やつと正午になり、近くのレストランに女性の同僚と一緒に食事をしに言った。ほとんどの会話は、韓流ドラマなどの話題があるが、かずみはあまりテレビを観ていないので、内容が良くわからず、ただ、適当につなぎしていた。そもそも、かずみはテレビを見るしたら、ビアン系のDVDしか観ていないのである。までは、かわいらしい10代のマイナーなグラビアアイドルのDVD

を観て、性的に興奮するくらいだから、とてもではないが、みんなの話にあわせられない。それは、韓流ドラマを見る時間がない。ほとんどなどがビアン系やグラビアアイドルのDVDを観て性的興奮したらオーネーするからである。

そしてレストランから帰った時、優しそうなイケメンの男性からつきあつて欲しいと言わされた。

他の女性なら二つ返事でおつきあいするが、かずみは男が大嫌いである。先日でも、優しそうな女性だと思い、女性同士の楽しい肉体関係を体験できると期待したが、そのお客様の本心は、若い女性を虐めることに快感を感じる鬼畜な女性だったから、たぶん、この優しそうなイケメンの男性社員も、絶対に影では鬼畜であり、つきあつたら何をされるかわかったものではないと思つて、冷たい口調でおつきあいを断つた。

午後の休憩時間、そのことを他の同僚に話したら、「あんた100年に一度のチャンスを逃したじゃないの！バカじやない」と言われたが、かずみにはかずみなりの価値観があり、みためがどんなにおとなしく優しそうでも、プライベートでは鬼畜趣味だと思い、もし、つきあつたら場合によつては命の保証はないと思つた。

たしかに、かずみの顔は、かわいらしい少年のような顔で、細い身体であり、スタイルも良い。だからレオタードや競泳水着が似合つのである。

かずみは思った、「あのような大人しそうで優しそうな男性ほど、実は鬼畜。真性サディストだから、つきあつたらミニスカートのメイド服を着るように強要され、その恰好のまま、ひとりで満員電車

に乗るよつに命じられ、「こ褒美と賞して、むち打ち100回くらわられるわ」そりこ「みんなが見ている前で、お漏らしを命じられるかも知れない」と勝手に過激な妄想をしていた。退社時間のとき、外は突然の雨が降つて來た。

かずみが冷たい口調で振つた、イケメンの男性が、話かけてきた「傘を貸しましようか？僕はもう一つおき傘があるから」と親切心で言つたら、かずみはキツイ口調で「あんたみたいな、へなへなした男性の傘を借りるくらいなら、雨ですぶ濡れになつたほうがマシだわ」と言つて、雨が降る都会の中に去つた。

## かずみの母親の惱み　かずみの心の傷

かずみは、もしあのイケメンの傘を借りたら、それこそ隙をつくることになる。それを切つ掛けに、しつこく交際することを求められるから、傘を借りなかつた。出社して傘をささず、雨の中を歩いた。12月の雨は寒い。

次の日、風邪を引いてしまつたため会社を休んでしまつた。体温が38度ある。

日曜日にバーが閉店するまでお酒を飲みつけ、タクシーで帰つて、かずみが住むアパートについた時には深夜3時だつた。寝不足と一日酔いの一重苦で出社し、夕方には雨が降つたが傘を差さずに自宅に帰つた。ずぶ濡れだつた。

当然、風邪を引くわけである。

かずみは母親に電話した。母親が「もつそろそろ結婚のことを考えなさい」と言つたら、かずみは絶対に結婚したくないと反論した。かずみの母親は、おかゆを作り、それを食べさせた。そして、かずみは何故、結婚したくないのか、何故、男性が嫌いなのか話した。「わたしが中学二年生のとき、不良少年から強姦未遂されたこと覚えている」と母親に話した。かずみの母親は、かずみの心の傷が癒えていないことを語つた。むしろ、それが切つ掛けで男が嫌いになり、異性に興味を失い、同性のみに興味を持つたことを知つている。

かずみの母親は「『めんなさい』。あなたの心の傷がまだ、癒されてないことを知らなかつた」と言つた。「あのときは、とてもつらかつたのね。変なことを思ひ出させて、『めんなさい』と、かずみの母親は言つた。

それ以来、かずみの母親は、結婚しなさいと変なプレッシャーをかけることをしなくなった。

かずみの母親が部屋から出て行った時、美少女アイドルの写真集を眺めながら身体を休めた。

「なぜ日本では同性同士の結婚が認められないのだろうか?」と天井を見て考えた。

「でも、わたし女に生まれて良かった。高校時代も大学時代も、オソナ同士で、隠れてエッチなことをしたし、一緒にお風呂入って、同じ布団の中でお互い全裸で寝て……。そして……。」とさまざま思い出が蘇った。決定打になつたのが、5年前にANDROID1990との出会いであり、5年間の同棲生活だつた。

学生時代では、社会人の時と比較すれば、時間があり、ANDROID1990と、さまざまなエッチな行為をしたけど、生身の女性と違つて、理想的な体型、本物の若い少女みたいな肌、触つた時の身体の弾力性など、もう理想以上の気持ちよさ。たぶん、未来から来た理想のダツチワイフだったのではないかと。あまりにも完璧な女性として作ったANDROID1990は、中毒性があつた。

「未来の人は良いな。あんな理想的な女性をモデルにしたANDROID1990と、好きなだけエッチなことができるから。わたしも早く20年後の未来に生きたいわ」と独り言を言つた。

で、風邪が治りかけてきた時、レプシーンがあるアダルト動画サイトをみたら、はきげをもよした。

まして、女性が男性の象徴に口を入れられるシーンをみると、急いでトイレに行って、吐いた。

そして、中学一年生のときのトラウマが蘇り、男がますます嫌いになつた。

レ プシーンがある動画をみると、自分が腹を殴られたり、頬を思い切り叩かれ、太ももに膝蹴りを受けた時、強烈な痛みで悲鳴をあげた。とても怖い体験だった。そのため体中に傷ができた。かずみは、その時、レ プされて殺されるのではないかと思った。そのトラウマを思い出させるのが、インターネットのアダルト動画サイトであった。

「男なんて大嫌い」かずみはつぶやいた。

## かずみの有給休暇 競泳水着で

かずみはスマートな体型をしており、競泳水着やスクール水着、そしてレオタードが似合つのである。

風邪を引いて、年休をとつて3日間、風邪も治りかけた時に、自分の体型を確認した。鏡で自分の体型を見るとき、競泳水着やレオタードを着て鏡に映して、体型が崩れていないか確認する。かずみは、自分の体型を、ものすごく気にするので、あまり食事を食べない。少食である。

ただし、かずみが「ンプレックスを感じるのは、顔が少年みたいであり、胸がほとんどないことである。

性風俗は第一印象が勝負だから、少しでもフューリーな雰囲気を出したいと思うが、髪の毛を肩まで伸ばしたときの自分の写真を、スマートフォンのソフトで、みると似合わない。男装すれば、かわいらしい男の子と良く間違えられるから、なるべく女らしい服装するのである。だから、普段着はショートパンツかミニスカートしか履かない。

だが、時々、女装が上手な「男の娘」だと思われるから、秋葉原やコミケには行かない。

かずみはウエストが、かなり細い。くびれがあるから、それをアピールすることによって、自分は女性だと言つことを印象つけるの

である。だから身体のラインが目立つ競泳水着しか着ないのである。

かずみは自分は男性脳ではないかと思いつゝは、若い女性の水着姿をみるとムラムラするからである。

スリムな体型だからビキニよりも、競泳水着が似合つ。夏になれば必ず競泳水着を着て海で泳ぐ。かずみの友達は、例外なくビキニであるが、かずみだけは競泳水着である。

だから、かずみはビキニの水着は持っていないが競泳水着なら何着でも持つている。

競泳水着だと、身体を少し締め付けられたような感じがするので、抱かれたときを思い出すからである。ビキニの水着にない気持ちよさがあるからである。

「だつて、私がパンツ（長ズボン）を履く姿を見ると、まるで男の子みたい。髪の毛を伸ばしてもロン毛の男子だと思われるし。問題は顔なんだわ」と、つぶやいた。

だから、間違えられないように、女性的な服装をする。その結果が、上はノースリーブのブラウスかタンクトップ。下半身はショートパンツやホットパンツ、そしてマイクロミニスカートになってしまつ。寒いときは、タンクトップの上にジャンバーをはおり、膝まであるロングブーツを履くのである。そしてさまざまな女性らしい飾り付けをして、自分が女性だと訴つことをアピールするのである。

それに脚全体を出した方が、動きやすいし脚が長く見えるからであ

る。

いかにも動きやすい恰好をするから、ボーカルを強調せたりしまつのである。

## 暇な待機時間 かずみ、かわいらしい女の子に

かずみの身長は170センチで女性では背が高い。

顔は少年みたいで胸がほとんど無い。そして背が高いといつコンプレックスを持っている。

「わたしつて、人が思っているほど活潑でもないし、むしろ内気。ただ女の子だけには積極的なだけ。キャリアウーマンでもないし、仕事もたいしてできない」と、つぶやくほど自分に自信が無い。通勤のときには女性専用電車に必ず乗るが、パンツ（長ズボン）はいて通勤をすると男性と間違えられるので、ほとんどミニスカートに黒のストッキングを履いて出勤してくる。時々、パンツを履いて通勤をすると、かわいらしい少年が間違つて女性専用車両に乗つてしまつたと勘違いされることもあるが、かずみにとつて女性専用車両はとてもありがたい。

むしろ始発から終電まで、土日・祝日でも女性専用車両を運転して欲しいと思っている。

土曜日の朝、かずみはいつも癖で女性専用車両に乗つたら、男性もいて驚いたが、土曜日は女性専用車両でも男性が乗ることができるのである。そのままビアン系デリヘルのお店に向かつた。

朝10時半に店長に挨拶をして、次から次へビアン系風俗嬢が出勤してきた。

そして11時から営業が始まり、何人かの風俗嬢がラブホテルへと行つた。店長も、ビアン系風俗嬢を自動車で送り出すとき、かずみ

と内気そうな風俗嬢の一人だけになつた。もう一人の風俗嬢は身長が少し低く、かわいらしい女の子であった。

かずみと同じマイクロ///スカートにタンクトップという服装をしており、かずみは、その子を見ると抱きたくなる衝動に駆られた。お店には予約のお客がしばらく来ないようなので、かずみはそのかわいらしい女の子の太ももを触った。「いやっ！」と小さな声がした。かずみは、その声がかわいらしいので、我慢できず抱きしめた。「抱き心地が良い子」と思った。そしてスカートの中に手を入れた。

そのとき店長が来て、けげんな表情をした。

店長は何も無かつたように、かずみに注意をしなかつた。

店長は、30代後半から40代くらいの眼鏡をかけた女性である。他のビアン系風俗嬢には厳しく指導することがあるが、かずみにはほとんど注意しない。かずみに対して何も期待しないのか、背が高く男っぽい顔をしているから注意しにくいのか、どちらかである。だから、待機中は何のストレスもない。

かずみはO型の仕事や友達（同僚）関係では、とても消極的だが、ビアン関係ではとても積極的だった。そのアンバランスさが、かずみに強いコンプレックスを抱かせた。「何の承諾なしに、隣の風俗嬢の女の子にいきなり抱きつくなんて、わたしまるで獣みたいだわ」と、店長に叱られるよりも、気が落ち込んだ。

## SIMプレイが終わった後、慰めに

かずみが一人でビアン系風俗店に待機中、かずみにお客さんからの指命があった。

それは、カップルからの指名である。

かずみはきつぱり断った。

だが店長は、丁寧な言葉で言った。「かずみちゃん。もし、嫌なことがあつたらいつでも、このお店に電話してちょうだい。かずみちゃんだけが指名が少なすぎるし、新たな体験だと思って、頑張つて行つてらっしゃい」と優しい口調でいわれると断りにくいのである。

かずみは中学一年のときレイプされそうになつた嫌な思い出があり、それ以来、男性が大嫌いになつた。まして、カップルの男性の前で、裸でレズプレイをするなんて、恥ずかしくてできない。かずみにとって、とても嫌な仕事だった。

店長と一緒に、某ラブホテルへ自動車で送つてもらい、お客さんがいる部屋まで案内された。

その時、出てきたのは、男性用競泳水着（ブーメラン・三角状）を履いた男性であった。

見てはきげをもよおした。田をそむけながら男性のお客と話した。

かずみにとって男性の裸を見ると気持ちわるくなるのである。

部屋に入ると、ボロボロになつたミニスカートのメイド服を着た若い女性がいた。

痛々しいく感じた。お店に電話して、今日の指名を断ろうかと思つたが、店長は今、自動車でお店に向かっている最中。店長の携帯電話の番号が解らない。

カップルの男性は、とても紳士的で言葉使いが良く、性格が良さそうだが、かずみは、その男性に強い嫌悪感を感じた。

うすくらい部屋の中でも、鞭で打たれた傷が見えるほどであり、メイド服は背中を中心にはれていた。そしてSMプレイの縄が部屋の中で散らかっていた。

男性は「彼女を君の肌で慰めて欲しいだ」と言った。

で男性は、「最後の仕上げを」と言って、かずみに、その女性を羽交い締めするように指示した。

かずみは、女性を羽交い締めしたとき、男性は、その女性の腹にパンチを入れた。

「ボッスツ」という音がして、女性から「痛い！」と小さな声が聞こえ、立つ力を失い、かずみが羽交い締めした腕を振り切つて自分の腹を、押さえようとしたとき「しつかり立たせろ！力一杯、その娘を羽交い締めしろ！」と、かずみに指示した。

かずみは目を思い切りつぶり、その光景を見たくなかつた。その時、レイプされかけた時のフラッシュバックが起き、かずみは急いでトイレに行き、嘔吐した。

男性は「やるすぎたかな」とつぶやき、

「では、その娘を抱いて慰めて欲しいのだ。まず初めに口づけを」と言われて、かずみは、その娘へ顔を近づけたら、いきなり、その女性からビンタを食らわされた。

かずみは本能的に「この子はレズではない。レズプレイを強要されているだけなんだ」と感じ取った。

かずみは、男性のお密に怒鳴りつけたい気持ちを抑え、丁寧な口調で言った。

「お密さん、これはやり過ぎではないですか？あの子、レズではないし、それを強要されても、私としてはあまり気持ち良いものではありませんから」と言つたら、

その男性は「この子は真性マゾなんだ。だから、いじめが酷ければ酷いほど快感に感じるのだ。ぼくが君を指名し、君はこの時間にこの子を慰めて欲しいのだよ」と丁寧に説明した。

「では、この」と一緒にお風呂に入ります」とかずみは言い、その娘のメイド服を脱衣所で脱がせ、かずみも服を脱いだ。そのマゾの娘は、恥ずかしそうな顔をした。

お風呂場では都合良くお湯が入つており、かずみは「そんなに恥ずかしがらなくとも良いのだよ」と言つて、そのマゾの娘は、かずみに背中とお尻を向けながらお風呂に入った。

お風呂場は照明が明るかつたので、背中に鞭が打たれた跡がたくさんあり、それを見て、かずみは、その男性のお客に強い憤りを感じた。「なんて、酷い人なの」と言つたとき、「なぜ、あなたがそんなことを言つ資格があるのですか！私の御主人様を非難しないで！」とキツイ口調で言われた。

かずみは、こんなに酷い目にあつても、御主人様を慕うとは、SMは奥が深いと感じた。

ふたりはお風呂に入り、しばらく黙っていた。かずみと、そのマゾの娘とはお互いに背中を向けたままだった。そして、長時間、お風呂に入ったままだと、のぼせてしまふから、一人はお風呂からでた。

男性のお客は、「ふたりとも全裸でこちらへ来るよ！」と言われ、かずみは異性視線があるので、そのマゾの娘の後ろ側にいて、自分の身体を隠した。そのマゾの娘は「そんなに恥ずかしがること無いわよ」と同じことを言われた。

かずみは、そのマゾの娘に肌がくつつきになると「離れて！」と言われた。

そしてベットの中で、二人とも全裸になつて横になつた。そのとき男性は「さっきの口づけをしてくれないか」そしてマゾの娘に言った「この子と口づけをしなかつたら、もう一度とお前とはプレイしないぞ。わかったか」と厳しい口調で言つた。かずみは相手が嫌々、口づけする女性では、あまり気持ち良いモノではなかつた。

男性の客が言つたように、口づけをした。あまり気持ち良く感じない。むしろ罪悪感さえ感じる。

『わたしはオンナ同士の口づけは、とても楽しいし気持ち良いけど、レズではない子と口づけをしても何とも感じないわ』と思つた。

そして、口づけをしたときマゾの娘は涙を流した。

それを見た、かずみは男性のお客に対する強い嫌悪感を感じ、そして感情を抑えて「相手が嫌がることを強要するのは、もう△△ではないのですか」と言つた。

その男性も△△だが、鬼ではない。「もういい。これでやめよう。ぼくがやり過ぎたから」と、意外と素直に、かずみの言葉に従つた。

性風俗の世界に身を投じる、かずみは、ますます風俗業界の厳しさを痛感した。

## むへ、やめようかな？性風俗業界を

かずみは、前回のカップルのお客の件により、人間の性欲は多様であるが、SMはとても苦手である。

性風俗で稼ぐのをあきらめるのは、200年後の未来に行くことをあきらめるのと等しいのである。

まして会社に内緒でやつてることだし、それ自体が違法行為なのである。

会社の社員規定では、無断でアルバイトをしてはいけないという規定がある。

それを破つたことが知れたら、最悪の場合、解雇される。

「O」の仕事も、正社員だし福利厚生も充実しているし、もし今勤めている会社を辞めて、性風俗業に専念するほど度胸はない。AVでビアン系の女優をする度胸もないし、もし会社にばれたら、そう考えるだけで「わたしつて、弱虫」と自分を責めてしまうのである。かずみは、まるで弱気な少年そのものだった。服装をパンツにブラウスだけにすると、まるで、かわいらしい少年みたい。鏡を見ると、自分に対する劣等感が強くなるだけである。

「唯一、救いなのはスタイルが良いだけ。顔も女っぽくないし、まるでロン毛の少年みたい。こんな私だから、お客様からの指命がないのだわ」と気が落ち込み、次の土日は、お店を休むことにした。

ついでに金曜日も休んで、木曜日の夜は、お酒を飲んで気分転換しようと考えた。

「美味しいつまみとカクテルをいただいて、気持ち良くなつたところで寝る。お昼まで寝て、そして電車で宛のない旅をして気分転換しよう」と考えた。「もし、わたしが男の子に産めたら、合法的に女の子と恋愛して、女の子とエッチな子とし放題なんだから、男に生まれた方が良かつたかも」とつぶやいた。

かずみは、とてもボーカルだから活発で気が強いと思われがちだが、実際は気が弱く内氣である。

木曜日の夜、スナックにいきカラオケを歌つて、日頃のストレスを発散し、自分が風俗業で働いていることを知らない人に話し、その業界での苦労はなしをして、普段言えないことを言って気持ちがスッキリした。そして、明日の朝は、電車に乗つて遠くに行こうと思ったが、いつもの癖で、ビアン系のDVDを観て、何度も長時間オーナーしたら、いつのまにか朝になつてしまつた。

少し仮眠したつもりが、夕方になつてしまつた。

「せつかくの平日なのに、寝て一日を無駄にしてしまつた。こんな私を誰か抱いて欲しい」と思い、逆に自分がビアン系のお客になれば、勉強になると思い、今からネットで検索して、ビアン系デリヘルの予約を取りに行こうとしたが、どこも予約で一杯だつた。そのとき「だれでも良いから私のことを抱きしめてくれる女人がいるか」と思つた。

結局、普段、少食のかずみは、一人で食べ放題に行き、お腹一杯食べて気持ち悪くなり、夜おそらくスナックに行きお酒を飲みに行つた。

愚痴を言つてもスッキリできても、自分の悩みを相談する人は誰もいないという孤独感を感じた。

ネットで、何軒かのビアン系風俗店に予約して、日曜日の夕方にやつと、予約が取れたが・・・。

## かずみ、性風俗店のお客になる

かずみは、初めて性風俗店のお客なる。ネットでは顔をぼかしているので、実際にあってみたいと、本当の顔がわからないのである。

かずみは、指名したビアン系性風俗嬢と、某ラブホテルで会うと、イメージしていたよりも容姿が劣っていた。むしろ内心、自分の方が、まだ女らしくかわいいと思っていた。そのビアン系風俗嬢は、かずみと違い、ちょっとふくよかであり、お腹が一段腹であり、脚が太い。

「なぜ、あんな子が性風俗の仕事が続けられるの?」と不思議に思つた。

こんな質問をすると失礼だと思つたが、質問した「すいませんが、あなたは何年、この業界で仕事をしているのですか?」

「約3年以上はつづいている」

「ビアン系の仕事して辛い」と、やめたくなる」となこのですか?」

「わたし割り切つているから、何とも思わないわ」

その性風俗嬢は、かずみのスタイルの良さに感銘して「あなたギャルやレースクイーンが似合つた。もしかしてその仕事をしているの?」

「いや私は、ただのO」です」

かずみは、もしかしたら相談に乗つてくれると思つて、

「実は、私、会社に内緒で、ビアン系の仕事をしてこぬの」

そしてもう一言付け加えた「わたしって、良く男の子と間違えられる。それに胸がないし」

その性風俗嬢は「容貌が良い悪いの問題ではなく、根性があるか無いかの問題ではないの」と答えた。

「わたしも性格が悪いお密に当たることがあるが、仕事だと思つて割り切るわ」

「では、何があつても驚かないの」

「もう慣れつ」。何があつても驚かなくなつた。どんな仕事でも嫌なことはつきものなのよ。あんたの〇〇の仕事も嫌なことがあるでしょう」と言つた。

「私つて、お密とかから全然、指摘されないし、もつ辞めようと思つけど」

「もう少し頑張つて見れば」と励まされた。

そして、タチのかずみは、今回はネコ（受け身）になり、かずみは抱かれた。

他のビアン系のお店に行くのも勉強になるわと思つた。



## ノーパンは気持ちいい

かずみの休日の服装は、ショートパンツにタンクトップの服装で一年を過ぐのである。ある意味では露出症である。

土日にお店にこくときは、マイクロ//ニースカートかホットパンツのどちらかを穿いてくるのである。

マイクロ//ニースカートだと階段やエスカレーターを使うとき、後ろからパンツが見えるので隠すことがある。だから、隠す必要がないショートパンツやホットパンツのほうが気を使わないですむのである。

ホットパンツだと、下着のパンツを穿くとなぜかわざりわしさを感じるので、ノーパンである。

「ノーパンでホットパンツを穿くと、あの『ワワワ』した感触がいいのね」というので、次第にノーパンでホットパンツを穿く機会が増えるのである。風俗店の同僚は、その事を知つて「かずみったら、ノーパンだとお尻がたれるわよ」といわれグッセと来た。

「ノーパンでホットパンツを穿くと気持ち良いの」「と、かずみはつぶやいた。

ときどきお店の、おとなしそうな女の子に突然抱きついたり、胸や太ももを触つたりする。

店長は、かずみの待機態度が悪いので自宅待機を命ずるようになつた。それが、かずみにとつて心理的にグッサとくるのである。「わたしは、どうせ指名されることが少ないから、ネットで予約された

ときだけお店に来るだけなのね」と気が落ち込んだ。

次の土日は、ビアンソロードを見ているとき、ホットパンツの下には何も穿かず、電動マッサージ機を使って、オーネーをした。「癖になりそう。だけど女の人の肌が恋しい」とつぶやきながら、激しいオーネーをしているのである。

「気持ちよすぎて気が変になりそう」と思いながら、土日はお店から連絡が来るのを待っていた。

夕方、数時間に及ぶオーネーが終えると、ホットパンツは液で汚れた。お店から何の連絡もなかった。かずみは、これはやりすぎだと思つて、パジャマに着替え、テレビ番組を見た。

鏡を見て少年みたいな顔だと思い、「今日は誰からも指名がなかつたわ。もっと髪の毛を伸ばしてイメチェンしなければ」と思つた。

数週間後、髪の毛が長くなつて

かずみは、髪の毛を伸ばした。

会社の同僚から「何か心境の変化があつたの」とか「でも、短いほうが、かずみぽい」「以前の髪型のほうが良かつた」といわれたが、何が何でもイメチェンしたかった。

かずみはフェミニーンな女性になりたいと思つた。

だが、顔はどうしても少年のような顔なので、はじめに、眉毛を細くして、いかにも女らしい顔にしようとした。それ以来、かずみは化粧も濃くなり、旗から見れば「昔のかずみのほうが良かつた」という声が多かつた。

服装も普段着はマイクロミニスカートでなく、ひざまでの長さのスカートにした。

お店で写真を取り直し、それをぼかしてお店のホームページに載せた。

だが、以前よりも、指名がこなくなり、むしろ、かずみが髪の毛を伸ばしたのは、逆効果であつた。

店長は「かずみちゃんは、おばさんたちからみるとかわいい少年みたいで、ボーグ・シユだから見てるだけで元気になれる雰囲気があるし。だから『テー・トースの指名があつたのね。もとのかずみちゃんになつたほうが良いわ。最近は全然、指名がなくなつたから』と言つた。

美容院に行き、髪の毛をぱつぱつ切って欲しいとお願いし、耳がでるほど短くなつたので、しばらく男の子のよつな、かずみになつてしまい、当然、しばらく十日こなむお店に行くことができなくなつた。

通勤のとき、パンツはいて女性専用車両に乗ると、背が高い少年のような顔しているから、ほかの会社のOJからは、「なんなの！男の子がのつている！」と思われることがよくある。

なかなか性風俗で成功するのは、難しいと思った。

性風俗の仕事をして、以前よりも出費が増えたことに気がついた。

「これでは、自分の身体を冷凍保存させて200年後の未来に行く」とは、ますます難しくなつた」と、かずみは、つぶやいた。

## 穢れすぎたオンナ かずみ

かずみは一年、365日、余程体調が悪い時以外は、一日も休まずオーネーをするし、それも一日に2度、3度は当たり前である。

かずみ自身は、同性愛者でありビアン系のDVDを観てばかりいるから、ほとんどテレビ番組をみないから、世の中の動きが良く把握できないため、OJの同僚と話しが会わないことが多い。

その上、真冬でもミニスカートで生足で外出するから、異性の視線が脚に集まることが多々ある。

ジロジロみられると恥ずかしいが、いつでもエッチなことができる体制である。

だが、外見と裏腹に、男が大嫌いであるから、電車で痴漢に遭うと怒鳴り声をあげて「やめてくださいッ！！！」と叫ぶことがある。女性ならどこを触れても平気だが、男性が触るなら、怒鳴り声を上げるのである。

かずみも25歳であり、次第におばさん化するのを内心おそれている。

さらに年齢が加算すると体内の代謝が悪くなり肥満になりがちになるから、必要以上に食べないのである。だから、毎日、体重計に乗つて自分の体重を気にしているし、とくにウエストを測ることが多い。

せっかく風俗嬢になつたのに、ほとんどが、おばさん相手で、それもデータコースで、女性との肉体関係を持つことはほとんどない。だから、よけいにオンナの肌が恋しくなる。

だから、性風俗の仕事をしてから、以前よりも出費が増えた。とても性風俗は儲かる仕事ではない。

パソコンでオーネーのネタを探したとき、ビアン系出会い系サイトを見つけ、いつでも捨てられるWebメールを作り、ビアン系出会い系サイトに登録した。あまり期待していない。どうせ、世の中、思うどおりに行くほうが気持ち悪い。思い通りに行かないのが当たり前だと思っていた。

その時、すぐに20代のビアンの女性からメールが来た。「どうせサクラでしょう」と思い、自分のハンドルネームを「かずみちゃん」とした。

サクラだと、コンピューター処理なので、「かずみちゃんさん」という不自然なメールが来るが、「はじめまして。かずみちゃんへ」というメールが来たので、これは本物かと思った。

もしかしたらオンナ同士でエッチなことができると思つて、それを想像しただけで、ムラムラしてきて、パンツに手を入れてオーネーをした。そのとき、かずみはパンツ一枚でパソコンを使っていた。

ちょっとしたことで、頻繁にオーネーをするので、とても清い女性から、ほど遠く、自分は穢れきった女性だと思った。

でも、相手の顔がわからないし、もしかして、これもサクラかも知れないと思い、返事のメールを出したら、すぐに返事が戻つて来た。

相手も、今すぐにでも、オンナのカラダを求めているのがわかり、都内某所のラブホテルの入り口で待ち合わせることにした。



## 出会い系 悲劇の始まり

かずみは、黒に近い灰色のロングスカートを新着した。ウエストのところが少し重く感じた。

寒いので肌色のストッキングを履いた。黒っぽいジャンバーを着た。田頃の、かずみの服装としては、とても地味だった。寒いだけではなく、ラブホテルが乱立している場所だと変な男から声をかけられる恐れがあり、なるべく地味な恰好をした。

「喫茶店とか駅の改札口にすれば良かつた」と思った。

時間どおりに、相手の女性が来た。

「『めんね。ちょっと遅れてすみません。これからよろしくお願ひします』と丁寧に挨拶した。

気になるのは大きめのバックだったが、かずみは気にしなかった。

お互に詮索しないように気を遣つた。

ラブホテルの部屋にはいるとき、どの部屋がいいのか選び、そして料金を払い鍵を借りて、部屋に入つた。

だれも見る人がいないので気を使わぬですむ。

だが、気になるのは大きなバック。かずみは、夜食なのか着替えの服が入つていると思った。

「はじめまして。御主人様」と言われ、かずみは驚いた。

相手の女性は、すわり下座して「御主人様。私を存分、虐めてください」とお願いした。

かずみはSMが苦手である。

困惑し、何をしたらいいのかわからなくなつた。

「わたし、あなたのカラダの縛り方がわからないわ。いきなりSMなんて・・・」

「では、この私を鞭で打つてください」

「そんなこと言われても」

その出会い系であつた女性は自分で服を脱ぎ、黒いボンデイージの服に着替え、壁に手をついて、かずみに背中とお尻を向けた。

「さあ、御主人様、私をぞんぶんいたぶつてください」と言つたとき、かずみは「ちょっと、話し合いましょうー」と言つた。

だが「話し合つ前に、鞭をせめて10回だけやつてください」と言われ

かずみは、その女性のお尻を軽く鞭で打つた。

「御主人様、もっと強く」

かずみは思い切り、その女性のお尻に鞭を打つた。

「で、10回くらい鞭を打つたわ。ちょっと話しあって欲しいけど」

二人はソファーに座り、相手の女性は女王様を求めているのである子とを知った。

「なんか美味しい話しだと思つたら、そんなことなんだ」と思つた。

お互に詮索しないということにしているが、なぜ相手の女性がSMに目覚めたのか、それを聞こいつとする前に、その相手から話し出した。

「わたしは中学生の時に、学校の裏で人目がつかないところで、何人かの男性にレープされたの。そのままほっと置けば、子どもも産めるけど墮ろしたの。でも、やられたときの、とても乱暴され怪我して痛かつたけど、とくに初めに挿入されたとき血がでて、お腹の中がカツターでスッパと切られたような感じだつた。それいらい、男の御主人様の奴隸を経験したけど、やはりオンナのことはオンナが一番知つているから、オンナからイジメらなくなつたの」と話した。

「心の傷はなかつたの？」

「それが、子どもを墮ろしてからも、何度もレープされてつづけたの。気がついたら、もう子どもが産めないカラダになつていたけど、痛いことが快感になつて」と話した。

かずみはレ プ未遂で、心に大きな傷をいまだに解消されていない。  
だから男が嫌いである。

その一線を越えると・・。

共通しているのは、見知らぬ男性からやられると、アブノーマルな性欲になることだということ。

性犯罪に巻き込まれる女性の場合、心に大きな傷を抱き、場合により、精神的にかなり不安定になり、性的なことを強く嫌悪するか、性欲に溺れるかのどちらかである。

心の傷は、愈したから愈されるの？

かずみは、出会い系で出会った女の子が、「私は子どもが産めない身体にされた」ことについて葉にショックを受けた。

かずみは、同性愛者であり、一生結婚するつもりはない。そもそも、男性と結婚して子どもを作るなんて、想像できないのである。

でも女性として、もう「子どもが産めない身体にされた」というのは、「何度も中絶をさせられたから、いつのまにか子どもが産めない身体になった」ということだった。

要するに、集団で何度もレプロされ続けても、警察に訴えられない。訴えると仕返しが怖いから。

かずみは、その話を聞いて震えた。

もう、オンナ同士でエッチなことをする気にならず、出会い系で出会った女の子の身の上を聞くだけであった。なぜ、心の傷がないのか聞いた。

かずみは、出会い系の女の子の話を最後まで聞きつづけた。

あまりにもおぞましい話しながら、今夜は、何もエッチなこともせず。一晩泊まり、短時間で、その女の子と別れることとした。

あまりにもショッキングな話だったので、帰りにスナックによつてお酒を飲む氣にもなれず、毎晩行うオーネーも、ビアン系DVDを観る気になれなかつた。

世の中、あまりにも想定外なことが多い。

悪い夢だと思い、少しでも早く寝ようとして、やがてだけワインを飲み、そのまま寝てしまった。

本来なら、オンナ同士で一晩中、エッチなことをしようと思つたが、かずみにて、レープの末、子どもが産めなくなつた身体にされた話しを聞いて、ショックだった。

## 出会い系で、女の子みたいな『男の娘』と出会つ

かずみは、マゾの女性とは一度と会つことはないと思つたが、また出会い系の掲示板に、かずみ宛のレスがあった。メールアドレスがあり、メールしたら、女の子とやりたいといつから、こんどこそ、外れが無いと思つた。

そして金曜日の夕方、その、かわいらしい子と会い、ラブホテルへ直行した。

出会い系の子は、身長が165センチで、かずみより少し背が低かつた。かずみの身長は170センチであるから、女性としては背が高い。

むしろ、かずみの方が男性みたいに見える。今度は長ズボンに紺色のジャケットを着た。

だから、他の人たちから見ると男女のカップルのように見えるのである。

相手の子は、髪の毛が肩まで伸びており、かわいらしく女の子らしい服装をしているので、かずみは、こんどこそ、オンナ同士でエッチなことができると期待していた。

ラブホテルに入り、部屋の中に入ると、その子の声は、かずみみたいに女性としては声が低いので、そのことはあまり気にしなかった。

そして、二人は服を脱ぐと、その出会い系の子には、男の象徴あることに気がつき、かずみは、憤りを感じた。

「あんた。私を騙したわね！」

かずみは怖い顔をした。その、男の娘をにらみつけた。

その男の子は裸で、おびえながら、泣き出した。

かずみも気が弱い女の子だから、もう怒るのは、やめて、話しを聞くことにした。

そして二人とも服を着て、ソファーにすわってテーブル越しで話しあつた。

「もう、泣くのを止めて。あなた男性でしょ。どうして、人を騙すことをするの？」

その時、その女の子みたいな男の娘は、強い口調で「僕の肉体は確かに男性だが、心は女なんだ」ときつぱり言った。

『たしかビアン系風俗店でも、性同一性障害者のサービスがあるわ。肉体が男性でも、心は女性の人もいるわ』と考えた。

その男性は、確かに肩幅が狭く痩せている。脚も細い。体毛も少ない。その上、全身の体毛を処理している。むしろ、かずみの方が男性的である。

男性なのにウエストにぐびれがある。バストが無く、男の象徴があ

るところに以外、まるで、かわいらしい女の子みたいだつた。顔もかわいい女の子みたいであり、かずみの方が少年らしい顔をしている。

「だまして、『ごめんなさい』と泣くから、かずみは、なぜか、その男の娘が、とてもかわいい女の子みたいに見えるので抱いた。本物の女性よりも、かわいいからである。かずみは不思議な気持ちになつた。『今、抱いているのは男性。拒絶反応はない。何故だろう?』と不思議な気持ちになつた。

でも、レズプレイをする意欲はなかつた。

かずみにとつて、例の男性の象徴が気になつてしかたなかつた。

かずみは、せつかくだから、ラブホテルにあるカラオケを使って、ふたりでカラオケを歌つて、盛り上がつた。そして冷蔵庫にあるビールを飲み、たのしい時間を過ごした。

今回も全然エッチなことをせず、ラブホテルから出た。

「今日は、たのしい、ひとときを、ありがとうございました」と 礼儀良く挨拶して、その男の娘は、かずみから去つて行つた。

かずみは、今回だけは、なぜか拒絶反応を出さなかつた。そして帰りにスナックに寄り、お酒を飲み、タクシーで帰つた。



## 2泊3日 SMの旅 その1

かずみは、ジアン系性風俗店に勤めている女王様みたいな先輩と、まだ18歳、高校卒業したての後輩との田舎への旅行に3人で出かけた。

18歳の後輩は、マジのジアンであり、同性から性的虐待を受けると快感に感じるのである。

後部座席に、かずみと18歳の後輩が乗り、女王様みたいな先輩がクルマを運転した。

「ねえ、目的地まで休み無く自分の手でオ一一しなさい」と18歳の後輩に命令した。

エンジンがかかり、ミニスカートの中に手を入れ、18歳の女の子は、休み無くオ一一をつけた。

ちょっとでも手を休めれば、先輩の女王様から強い口調で叱責をうける。

そしてわざと、人目がつくように、わざと渋滞している道路にクルマを移動させる。後部座席がまる見えなのである。

かずみも、左隣の女の子がオ一一しているのを見て、性的な興奮した。

理性を失い自分もやりたくなったとき、「先輩、私もしても良いですか?」と訪ねたら

「でも、いま道路が渋滞しているし、みんなの目があるから、空いてからの楽しみで良いじゃないの」と言われた。

たしかに渋滞してクルマがゆっくり移動しているから、歩道からの人目があり、かずみはオニーをするのを我慢した。かずみは人にオニーを見せるのは恥ずかしいモノがある。だが、18歳の後輩の女の子は、みられる逆に興奮するタイプであるから人に見せられても平気だつた。

18歳の後輩の女の子の服装は、だんだん乱れだし、ブラが外れ、左手で自分の胸を揉みだした。白のブラウスは前にボタンがついていて、まるで女子高生が着る制服みたいだつた。

女王様みたいな先輩は、後輩の女の子が、目的地の旅館に到着まで手を休めるのを許そつとはしなかつた。

18歳の女の子は「手がしごれてきました。お願ひだからバブで勘弁して」と言つた。

かずみは「このままだと腱鞘炎けんじょうえんになるから、この辺で勘弁したら」と先輩に言つた。

先輩「かすみちゃんがいつから、この辺で勘弁するわ。でも到着したら、その分、厳しくお仕置きするから覚悟しなさい」と言つて、18歳の女の子は、手を休めた。

その時、かずみは、18歳の女の子の太ももをさすつた。後輩の女の子から「ああんっ・・・」と小さな声がした。

「流石、10代の女の子の肌はすべすべしている。ふとももが柔らかい」

かずみは明るい口調で、かわいい「ひやん」口調で、後輩の女の子に「旅館に到着したら、私と一緒にお風呂には・い・り・ま・しょう」と言った。

かずみは、18歳の女の子の後輩を「えものちゃん」と呼び、「えものちゃん。私と一緒に口づけしましょう」と後輩の女の子と口づけをした。

かずみは、久しぶりにオンナ同士でエッチな事ができる喜びを感じた。

その時、クルマの速度は速くなり、人目がつかない山道を走った。かずみは性欲のままに、後輩の女の子に対して、さまざまエッチなことをした。

後輩の女の子は、クルマといつ密室の中で、かずみの性欲の『獲物』そのものとなつた。

かずみは、この時間が永遠につづくことを望んだ。

「久しぶりに、女の子とエッチなことができる。私オンナに産まれて良かつた」と喜んだ。

女王様みたいな先輩は、「もう少しで目的地に到着よ」と言い、そして後部座席に座つてゐる一人は、服装の乱れを整えた。

クルマの中は、女性がエッチな事をしたことで、オンナ臭さがあつた。

そして、目的地に到着したら、外の空気が、おいしく感じた。

「えものちゃん。これから、私たち一人でお風呂に入らう」と、か

かずみは明るい口調で、後輩の女の子に言った。

「クルマのトランクを開け、荷物を持つとき、18歳の後輩の女の子は、かずみと女王様の先輩の荷物を持つた。」

かずみ「いいのよ。えものちゃん。自分の荷物は自分でもつから」

「先輩、遠慮しないで、ドシドシわたしに要件を言いつけてください。そして、わたしに日頃のストレスをぶつけてください」と丁寧にお辞儀した。女王様みたいな先輩は、この後輩にメイド服を着せれば良かつたと思った。今回は女子高生みたいな服装だった。

女王様みたいな先輩は、「彼女の自由にさせたら。この娘、人に奉仕するのが好きだから」

で、かずみは、後輩の女の子の境遇は聞こうとしなかった。前回、出会い系でラブホテルで出会った時、頻繁にレ プされたすえに子どもが産めない身体にまでさせられたという話しを聞くと、恐ろしさを思い出してしまうからである。

かずみは「えものちゃん」と名付けた女の子が、何故、ビアン系でマゾになつた理由は一切きかない事にした。

身長が低い女の子が、重い荷物を持つが、ここはほとんど人目がつかない寂れた旅館だつた。身長が高い女性が一人は、何も持たずに旅館に入った。

女王様の先輩は、後輩の女の子に「ねえ、私たちの荷物を丁寧に運びなさい」

「ま、荷物が落ちそうだよ。ちゃんと私たちのカバンを握りなさい」と口づめるやく注意したが、後輩の女の子は喜んだ表情をしていた。

旅館の中は、プライバシーが保たれ、女性3人は二階の客室へ行った。

旅館の女将さんが案内した。「いらっしゃります。お食事は何時頃がよろしいでしょうか?」

女王様みたいな先輩「午後7時半くらいが良いわ。その時間にお願いします」と言った。

女王様みたいな先輩はデジカメを持ってきた。ほとんどお密が来ない旅館だから隣の部屋は誰も来ない。旅館も昭和30年代に建造された、いかにも歴史が刻まれた雰囲気があり、レトロな環境である。

女王様「ねえ。隣は誰もいないね」

かずみは、ちょっと部屋の外を出で、様子みて誰もいない雰囲気だつたので「誰もいないです」と答えた。今はシーズンオフで平日。お密は私たちのみ。

女王様「では、これから、かずみちゃんが名付けた『えものちゃん』の調教を始めましょう」

かずみはSMは苦手である。

「先輩、私はSMが苦手なんです。なるべくならソフトなSMでとかずみはお願いした。

そして、『えものちゃん』と名付けられた後輩の女の子は、デジカメで白いパンツ一つだけの姿を十数枚もの写真を撮影した。かずみは「わたしよりも胸が大きい」と女子高生みたいな声で言った。

「だから胸が柔らかくて気持ち良いわけだわ」

そして、デジカメで女王様みたいな先輩は、後輩の女の子のヌード写真を何枚か撮影した画像を見せて言った。

「ねえ。これをネットでばらまかれたくなかったら、私たちの言つことに服従しなさい」と言われ

「服従します。好きなだけいたぶつけてください」と言った。

「今回は、かずみちゃんがいるから、ハードな責めはしない。だから鞭打ちをしない」

その『えものちゃん』と名付けられた後輩は、物足りなさそうな表情をした。

確かに、かずみは、SMは苦手である。まして前回のように壮絶な体験、子供が産めなくなるまで辱められた女性が、マゾだったという話しが思い出したくないからである。

かずみは、これから服を脱ぎ、旅館の浴衣に着替えようとしたとき、後輩の女の子は、パンツ一つだけの姿で、かずみに「先輩の着替えは、私がします」と言い、かずみの服を脱がせた。

かずみの下着のブラを外したとき、かずみは、後輩の女の子に抱きついた。

「先輩、もつと、きつくなれてください」蛍光灯に光に照らされた10代の女の子の肌は、ピカピカに反射している。なめらかさを感じさせる肌である。きれいな肌色をしている。腰にはくびれがあり、太ももは長く細い。かずみにとって、それが性的強い刺激になり、性的に強く興奮した。

かずみ「肌がすべすべしていて気持ち良いわ。それに抱き心地もいいし」

二人の女の肌が密着した。

そしてオナナ同士でエッチな事をした。  
あまり、よけいな事を聞かないために、かすみは後輩の女の子と激しい口づけをした。

その時、先輩は「この辺でやめましょう。かずみちゃん」と言われ、後輩の女の子から旅館の浴衣を着せてもらつた。

そしてパンツ一つだけの後輩の女の子は、女王様みたいな先輩からきつく縛縛されたい。だが、かずみの目があるので、縛縛をするのを止めた。後輩の女の子に手錠と足かせをつけて、パンツひとつだけで、しばらく放置させた。午後4時のことである。



## 2泊3日 SMの旅 その3 先輩との対話

午後4時に、かずみと女王様みたいな先輩は、旅館のお風呂場に行つた。

旅館の脱衣所で浴衣を脱ぎ、そして二人は全裸になった。

かずみ「わたし、胸が全然無いの。だからオンナとして魅力がないし」

先輩「かずみちゃん。もつと自分に自信を持ったら良いよ。かずみちゃんは脚がとても長いし、スタイルも良いし、顔の表情が優しそうだから」と優しい口調で答えた。

かずみ「そつかな。でもお客様が、ほとんど来ないし」

そのままお風呂に入った。広いお風呂場には、かずみと先輩の二人しかいない。

先輩「かずみちゃん。SMがなぜ苦手なの」

かずみ「実は、私、中学二年の時にレープされかけたことがあって、それ以来、男が怖くなり・・・。

それに、たていの男の人はSMが好きでしょう。サドは乱暴で、マゾは気持ち悪いし。やさしそうな顔をした男ほど、怖いものないわ」

先輩「でも、もう10年以上前の事件だったでしょ」

かずみ「顔殴られ、脚は傷だらけになつた。もう思い出したくない」

先輩「いやな事、思って出してしまつて」めんね

かずみ「先輩、気にしないでいいですよ。そのお陰で、私オンナに生まれて良かったと思つから」

先輩「でも、この世の中には、もっと心の傷をあつている女の子がいて、自分で自分の身体をナイフで傷つける子がいるのよ」

かずみ「そんな子がいるのですか？自分で自分の身体を傷つける子が・・・」

先輩「そつよ。だから、あの、えものちゃんなんか、まだ良い方だわ。で、これから、今の仕事を続けるのでしょうか」と優しい口調で訪ねた。

さらに「でも、かずみちゃんは、まだ、努力が足りないわ。ネットでもっと自分をアピールしなければ。ブログをお店のホームページにリンクするとか、それに、かずみちゃんの顔は、やさしそうだから、顔をハッキリだすのもありだし」

かずみ「顔はハッキリだすのは、今できない。私、O-LINEの仕事をしているし、それも正社員だし」

先輩「でも、かずみちゃんだけ、土田、のみ出勤で、平田は完全オフなんだけど、それだとあまりお客様がつかないし」

そう厳しくことを言わされて、かずみは考え込んだ。

そして、お風呂からでて身体を洗い、またお風呂に入った。

先輩「かずみちゃんは、なぜ、この仕事を選んだの？それも会社に内緒で」

その質問をされて、一瞬、考えた。正直な事は言えれば笑われる。

かずみ「実は、わたしつて、オンナに対して、とても淫乱なの？毎晩のようにビアン系のDVDを観てオーネーしないと生きていけない。同性愛が禁じられたら死んだ方がまだマシ！どんなに美味しい食事よりもオンナが好きなの。だから私は、この仕事を選んだの」

先輩「それだけ好きなら、〇〇やめて、この仕事に没頭してもいいじゃないの」と、また厳しい一言がきた。

かずみは、それを言われて、自分の考えが甘いと思ったのは、5年間、一緒に暮らしたアンドロイド1999と再び会つために、200年後の世界に行くためお金を貯めることなんだと考えた。はじめは風俗の仕事は、儲かると思ったが、実際は、以前よりも出費が増えた。貯金も徐々に減ってきた。むしろお金ためるどころではない。

風俗の世界で儲けるには男性を相手にした仕事をするしかない。それもキヤバ嬢とかSMの女王とか。

で、逆に先輩に質問した。

「先輩は、なぜ、このビアン系の仕事をするようになったのですか

？」

「それは、かずみちゃんと同じ、オンナが大好きだから。ただそれだけ。ビアン系の仕事はたいして儲からないし。儲けるには努力するしかない」と答えた。

二人はお風呂から出て、旅館の浴衣に着て、冷たいものを飲んで、ソファーで一人はゆっくり話し合った。

で、後輩の、えものちゃんは、一時間ほど手と足に手錠されたまま放置プレイされた。

かずみと先輩がお風呂から出て、後輩の女の子の、えものちゃんが2時間も放置されたままであった。

えもの「おねがい。手錠をほどこて。」のままだと漏洩してしまって、「

かずみは「先輩、えものちゃんの手錠をほどいたら。トイレへきたいみたいだから」

先輩は、かずみの言葉を聞かないふりして、持ってきた雑誌を読んだ。

えもの「かずみ先輩、私を抱いてください」

先輩は、かずみが抱こうとしたら、かずみに話しかけた。

そして、その廊下で、かずみに注意した。「ねえ、えものちゃんは今、放置プレイの最中なの。あと一時間ほど放置させてから、トイレにいかせるわ」

「でも、もし本当に漏洩したら旅館の女将さんから何と説明したらいいの?」

先輩は考えた。

「ちょっと話し合いましょ」と言つて、元のソファーがある場所に行き、30分だけ話し合つた。

時計が午後6時半を示したとき、もとの部屋に戻った。

えものちゃんの腕は後ろ手にある手錠と足枷せをほどいた。

手錠と言つても布製のものであり、ベルトと同じ構造をしてこむ。手錠と言つても布製のものであり、ベルトと同じ構造をしてこむ。

で、先輩のサディストさがでてきた。浴衣を着たいなら、先にパンツ一つのかつこいのままトイレに行きなさいと命令した。若い女性がパンツ一つで廊下をでて、トイレまで行く。

小さな旅館なので、トイレは廊下の突き当たりにある。

他にお客さんはいないが、女将さんや旅館の社員と会うかもしねい。

でも、先輩の命令は絶対服従である。トップレスの状態で廊下をおそるおそる歩きながらトイレに行つた。

えものちゃんと名付けられた後輩の女の子は、両腕で胸を隠すよくな恰好で、元の部屋に戻つた。

もし旅館の職員から、自分がパンツ一つだけで廊下を歩いたのを見られたらどうしようかと考えながら、廊下を歩くと、強い緊張感があり、それだけで興奮してしまつた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0757z/>

---

かずみ・2200年の未来へ行く

2011年12月21日19時51分発行